

宮城道雄作曲《手事》再考

千葉潤之介
(本学大学院教育学研究科)
久留智之
(本学大学院教育学研究科)

序

本稿は、宮城道雄(1894～1956)が昭和22年(1947)に作曲した箏独奏曲《手事^{てこと}》の、とくに第一楽章の形式に関する分析的研究である。

自作《手事》について、宮城自身は次のように語っている。

お琴をおやりになる方は、どなたもご存知のことと思いますが、琴の曲にはよく唄と唄との間に長い合の手^{ソナタ}がありまして、これを箏曲の方では手事^{てこと}とっておりますが、私も、ベートーヴェンのピアノ奏鳴曲などをきいてこの手事^{てこと}などを土台にして、唄のない形式的な曲をこしらえてみたいと存じまして…(中略)…もともと今までにも、若い方でそうしたことをやっていたりしゃる方もありますが、私は、三楽章に致しまして、第一楽章には手事^{てこと}をつかかって、これをソナタの部分にして、第二楽章のアンダンテは、お琴の方に「組歌^{くみうた}」というゆっくりした曲調がございますので、これを採り入れることとし、第三楽章には、やはりお琴の方に「輪舌^{りんぜつ}」という速い手のものがございますので、これを用いまして、ロンド形式にまとめてみたわけでございます。¹

以上の談話から、宮城は《手事》を「箏ソナタ」との認識で作曲したことが明白である。ただし、宮城は形式についてこれ以上の詳細な解説をしておらず、このことから、この作品の形式的側面に関しては、過去に以下の5種の研究がなされてきた。

- ①鈴木ゆみ子著「宮城道雄の《手事》に関する一考察」昭和46年度東京藝術大学大学院修士課程修了論文, 1971
- ②吉川英史, 上参郷祐康著『宮城道雄作品解説全書』邦楽社, 1979, pp. 336-347
- ③千葉潤之介著「ソナタ形式と宮城曲『手事』」『宮城会会報』第129号, 1984, pp. 50-64
- ④小野衛著『宮城道雄の音楽』音楽之友社, 1987, pp. 252-256
- ⑤千葉潤之介著『「作曲家」宮城道雄—伝統と革新のはざままで』音楽之友社, 2000, pp. 166-176

①は《手事》の分析に関する最初の、かつ唯一の学術論文である。②は宮城道雄の作品(全425曲)のうち、197曲の分析的解説を行った書であるが、その《手事》に関する簡略な分析は、①の成果を踏襲したものであり、少なくとも《手事》の分析に関する見解は①と同一と考えてよい。③は学術論文という形態はとっていないが、《手事》の、とくに第一楽章の分析について、新たな見解を表明したものである。④は宮城道雄の生涯に沿いつつ、各時期の代表作を解説した書で、《手事》の第一楽章の分析に関しては簡略ながら上記の研究のいずれとも異なる見解を提示している。⑤は宮城道雄の、作曲家としての初期のキャリアに焦点をあてた研究書である。この書に「参考」として掲載された《手事》第一楽章に関する文

1 鈴木ゆみ子著「宮城道雄の《手事》に関する一考察」昭和46年度東京藝術大学大学院修士課程修了論文, 1971, pp. 36-37。ビクター EPレコード(EV-4051, 1958)解説より抄録したもの。

章は、基本的には③の見解を踏襲したものだが、部分的に改訂がなされており、この時点での著者の最終見解と考えて差し支えない。以下、①②を「鈴木説」、③⑤を「旧千葉説」④を「小野説」と称する。

このように、ことさら《手事》の形式が問題にされる理由は、この作品が圧倒的に声楽曲や標題音楽の多い宮城の作品の中では、きわめて特異な純粋器楽の形式的音楽であり、それがまた、宮城の洋楽理解度についての格好のパロメータになると判断されるからにほかならない。宮城は昭和6年(1931)以前に朝日新聞に寄稿した随筆で次のように述べている。

今、私は創作する上に、二つの方面をとっている。一つは古楽を復活させて、これに現代的な色彩を加えることと、今一つは、洋楽の形式に於てどこまでも、邦楽発展の境地を作り出すことである。この二様の試みは私の抱負であると共に、現代の日本人の求めるところであるに違いないと思うのである。²

まさに《手事》は、上記随筆で表明された抱負2種のうちの後者「洋楽の形式に於てどこまでも、邦楽発展の境地を作り出すこと」という宮城の創作姿勢がもっとも強く、また純粋に打ち出された作品であると考えられる。これまでも宮城は、三部分形式をはじめとして、ロンド形式、変奏曲形式など、さまざまな洋楽形式を用いたさまざまな演奏形態による作曲を行ってきたが、おそらく、最後まで課題として残されていたのはこのソナタ形式であっただろう。宮城は自身の晩年が始まる戦後の昭和22年(1947)に至って、ようやくソナタを作曲する時期であると感じたのかもしれない。そして、それは宮城自身の洋楽理解とその実践能力に対する挑戦の意味もあったのではないかと考えることができるのである。³

さて、前記研究③⑤の著者である千葉潤之介は、作曲家久留智之との共同研究として、今回、この作品の形式面についての懸案を解消すべく、あらためて最終的な形式分析を試み、ここに新たに「千葉・久留説」として提示する。

先行研究の概要と本研究の方針

《手事》の現行公刊楽譜⁴によれば、この作品の調弦は全曲を通じて「平調子(一は五の乙)⁵ 第一弦=巻越⁶」(p.27 譜例1参照)という指示がある。この調弦法は八橋検校を祖とする近世箏曲におけるもっとも一般的な調弦⁷であり、都節音階(陰音階)に基づくものである。また、全曲の構成は以下のようになっている。

第一楽章「手事」 中庸に
第二楽章「組歌風」 緩徐に
第三楽章「輪舌」 速く

それぞれの楽章には伝統的な箏曲用語に基づくタイトルが付されており、全体的な曲調やそこで用いられている手法を暗示している。また形式面では、第三楽章についてはすでに宮城自身がロンド形式であると述べており、前記三者の説においても、多少変則的なロンド形式であると認めている。第二楽章について宮城は形式上の発言をしていないが、この楽章は一見して比較的単純な三部分形式と認められる。問題は第一楽章である。詳細は後述するが、鈴木説と旧千葉説ではソナタ形式と認定しているものの、小野説では三部分形式としている。さらに、鈴木説と旧千葉説においても、ソナタ形式であるという点では一致

2 宮城道雄著「音楽の世界的大勢と日本音楽の将来」『新編 春の海 宮城道雄随筆集』千葉潤之介編、岩波書店(岩波文庫)、2002、pp.32-33。

3 千葉潤之介著『「作曲家」宮城道雄—伝統と革新のはざままで』音楽之友社、2000、p.166を敷衍。

4 宮城道雄著、宮城喜代子、宮城数江作譜『箏曲楽譜宮城道雄作曲集 手事』大日本家庭音楽会、1995。

5 「第一弦は第五弦の1オクターヴ下」の意。

6 日本の音名で、ほぼD音に該当する。

7 ただし、譜例1のごとく、通常第一弦は第五弦と同音に調弦する。

しているが、主題の小節数（どこまでを主題とするか）や再現部の開始位置等について、かなりの相違がある。むしろ、三部分形式とする小野説とソナタ形式とする旧千葉説では各部分の区分けに関しては一致しているのである。ただしこの点は、小野説が③の旧千葉説を参照した結果である可能性も否定できない。

以下にこれら三説における《手事》第一楽章の大きな区分を記す（楽譜は文末の五線譜による譜例2参照）。

鈴木説

部分名	小節番号	小節数
提示部	1 ~ 53	53
展開部	54 ~ 133	80
再現部	134 ~ 149	16
終結部	150 ~ 152	3

旧千葉説

部分名	小節番号	小節数
提示部	1 ~ 53	53
展開部	54 ~ 108	55
再現部・終結部	109 ~ 152	44

小野説

部分名	小節番号	小節数
第一部分	1 ~ 53	53
第二部分	54 ~ 108	55
第三部分	109 ~ 152	44

ところで、小野説のようにソナタ形式としていない説がある以上、はじめに、この楽章がソナタ形式であるのか否かという点についての本論における基本的な態度を決定しておかなければならない。

ソナタ形式は、その形式概念の中に西洋音楽の調性に基づく機能と和声の内蔵された複雑な形式であるため、TSDなどの機能が不明瞭なペンタトニックによる日本の音階（あるいは旋法）には元来適合しない。しかし、ペンタトニックの中にも主要音の存在はあり、また、日本には数種の異なるペンタトニックも存在することから、主要音の移動や旋法を移すこと自体は可能である。つまり、調性システムを大きくとらえれば、ソナタ形式の概念を箏曲に取り入れることは可能であると考えられ、少なくとも宮城は、《手事》の中でそれを試みようとしているように見える。そこで、本論では《手事》第一楽章をやはりソナタ形式ととらえ、大きな区分を次のように考えることにする。

千葉・久留説

部分名	小節番号	小節数
提示部	1 ~ 53	53
展開部	54 ~ 102	49
再現部 偽再現部	103 ~ 108	50
真正再現部	109 ~ 133	
結尾部	134 ~ 152	

各説のもっとも大きな相違点は、再現部の開始位置をどうとらえるかということである。本論では上記のように第103小節からとした。その理由は、それまで変更されていた調弦⁸が、この位置から再びもとの平調子に戻されており、第一主題が完全ではないものの再現されているからである。鈴木説では再現部が第134小節からとなっているが、これでは再現部があまりにも短く、ソナタ形式としての全体のバランスを欠いてしまうことは、旧千葉説においても指摘されている。また、旧千葉説、小野説のように再現部⁹を第109小節からとするのは、提示部の第一主題推移部が完全な形で再現されているために分かりやすいものの、そうすると、第103～108小節は展開部の最終部分ということになり、ここでは第一主題の冒頭動機がほぼ完全に現れていることもあって、どうしても、主題が「展開されている」というよりは、主題が「回帰した」という印象を受けてしまう。とはいえ、ここでは完全五度高い位置から再現が開始されることや、提示部における第一主題のアルペッジョやオクターヴ重複の旋律による明快な輪郭が避けられていることもあり、完全な再現部と考えることにもやや疑問を感じる、いわばグレーゾーンとなっているのである。

念のため、この部分の主要音について考察すると、展開部の最後部（本論では第六展開部¹⁰）では、A音の保続が見られ、A音が主要音として用いられている。しかし、調弦を平調子に戻した第103小節からは第一主題の動機が再現されるものの、主要音はA音のままであり、A音の保続感はまだ保持されている。また、この保続されているA音と第109小節以降の主要音D音とは完全五度の関係にあり、機能音声のドミナントとトニックの関係を連想させる。このグレーゾーンを展開部の最終部ととらえるか、再現部の一部ととらえるかについては意見の分かれるところであろうと思われるが、「見せかけ」ではあっても、一応、再現された印象をもつことから、本論ではこのグレーゾーンを「偽再現部 *Finta Ripresa*」と考えることにした¹¹。つまり、第103～108小節は見せかけの再現であり、真正の再現部は第109小節に始まる第一主題推移の再現からというとらえ方である。

以下、曲頭から順を追って分析結果を記す。

8 第54小節から半中空調子（六斗上り）に変更されている。詳細は「分析」の項を参照。

9 小野説では「第三部分」としている。

10 「分析」の項を参照。

11 旧千葉説においても、このことは「擬似再現」という表現で示唆している。千葉潤之介著「ソナタ形式と宮城曲『手事』」『宮城会会報』第129号、1984、p.62。

譜例 1 《手事》に出現する調弦¹²

平調子	中空調子
半中空調子(六斗上り)	雲井調子

分析

提示部：第1～53小節

第一主題（第1～8小節） 平調子

すでにこの部分で西洋音楽の動機労作の技法が随所に見られるが、本論の目的は形式分析であるので、ここでは形式に関するもの以外は扱わない。扱うのは主として主題や各フレーズの性格とフレーズ感、および調子変化と主要音の動向に関してである。

主題を8小節としたのは、曲全体のバランスとフレーズ感からの判断であり、この点については、旧千葉説と同様である。鈴木説では冒頭2小節のみを第一主題ととらえているが、それでは、いかにも全体とのバランスが悪いように思われる。ただし、冒頭2小節内にこの曲の重要な展開素材が凝縮されていることは論をまたない。

第一主題確保（第9～14小節） 平調子→半中空調子

左手の同音連打の和音による伴奏に、1拍目を分割した第一主題第1小節の動機が4小節間繰り返される。その後、同じ動機の縮小型による経過的な部分が2小節分付加され¹³、第14小節からは半中空調子に「転調」¹⁴する。

推移（第15～26小節） 半中空調子→平調子→中空調子→平調子

冒頭動機の縮小型が断片化されたもの（第15～20小節）、第一主題第7小節の動機の逆行リズム（第21～22小節）、主題の簡素化による経過的な節（第23～26小節）などで推移部を形作っている。

第二主題（第27～30小節） 中空調子→半中空調子

第一主題最後部のリズム型の敷衍によるスクイ爪を多用した同音連打が特徴的な部分。後半では同音連打によるシンコペーションが見られる。なお、この第二主題は古典の手事物《夕顔》¹⁵の手事部分に由来する2つの動機を前半と後半に配したものである。見かけ上、調子は中空調子と半中空調子で平調子は見られず、ソナタ形式の第二主題と同様の転調に対する設計の意図を感じる。

古典派のソナタ形式では、通常第二主題を属調や平行調で提示するが、ロマン派以降はその調性を自由化する傾向がみられる。《手事》第一楽章においても、押し手によるものとはいえ、暫時、原調から離れることにより、ソナタ形式の第二主題としての調的性格を強めている。

12 第一弦を D とした場合。押し手によって一時的に変更された調弦も含む。なお、《手事》ではすべて第一弦は第五弦の1オクターヴ下に調弦。

13 旧千葉説では、この2小節間を「確保的推移」としている。千葉2000, pp.168-169。

14 ここでいう「転調」とは「転調子」あるいは「転調弦」の意。ただし、ここでは押し手による一時的なもの。こうした見かけ上の「転調」は古典の箏曲においても頻繁に行われている。

15 菊岡検校作曲、八重崎検校箏手付による京流手事物。

推移（第31～33小節） 中空調子および平調子

上声部が中空調子、下声部が平調子の完全五度の平行和声による部分。

第二主題第一確保（第34～37小節） 半中空調子

この部分はすべて半中空調子であるため、1小節目のみ第二主題冒頭とは異なり完全五度低く始められるが、2小節目は第二主題と同じ音高（ただし1オクターヴ下）で奏される。また、後半では音高に関するヴァリエーションが見られる。

推移（第38～39小節） 平調子

動機のリズムの等分割によるヴァリエーション部。

第二主題第二確保（第40小節） 平調子

第二主題の完全四度上の確保。第40～49小節は全体として第二推移部と思われるが、明瞭に第二主題が提示されているため、この小節のみ第二確保とする。

推移（第41～49小節） 中空調子→半中空調子→平調子

厳密には、第40小節の4拍目後半から第二主題のリズムを半拍ずらしたヴァリエーションによる推移部。第44小節からは左手による和弦が挿入されている。

この部分は次のようなリズム的な構成の配慮が感じられる。つまり、前述の動機の1拍の前後の入れ替えによる半拍ずれヴァリエーション、第44～45小節でその動機に和弦を挿入（このフレーズは2拍単位）、第46～47小節では和弦を各拍頭に移動することでフレーズを1拍単位とし、第48～49小節で16分音符の上行下行が続く、といったプロセスをたどることにより、全体としてはテンポを変えることなく accel. 感を出すことに成功し、緊張度を高めているのである。

小結尾（第50～53小節） 半中空調子→中空調子→半中空調子→平調子

スクイ爪による第二主題冒頭動機の経過的な繰り返しと、和弦による結句。

展開部：第54～108小節

第一展開部（第54～62小節） 半中空調子→中空調子→半中空調子→中空調子→平調子

この部分から柱を移動して、半中空調子に調弦を変更する指定がある。つまり、ヨワ押しやツヨ押しなどの左手の操作による一時的な音高変化ではなく、箏全体の共鳴現象が完全に変化する方法での「転調」が行われている。ソナタ形式の展開部は、調的な変化が要求されており、その対応として、柱の移動により明確な展開部の開始を示したものと思われる。

ここでは主に第一主題の冒頭部分が展開されるが、わずか9小節間に5回の調子変化¹⁶があり、調子が頻繁に揺れ動いている。

第二展開部（第63～70小節3拍目前半） 中空調子→半中空調子→平調子→半中空調子

第一主題冒頭部の動機が、右手と左手により交互に展開されている。この音色の対比によって2声化した効果を出している。この展開は、漸次上昇し2点A音に収斂される。ここでも8小節間に4回もの調子変化がある。

第三展開部（第70小節3拍目後半～76小節） 半中空調子

第42小節からの提示部の推移に由来するスクイ爪と割り爪を多用した動的な音型による経過的部分である。調的には半中空調子で安定しているが、主要音はほとんど感じられず、音階内の音が揺れ動いている。

第四展開部（第77～86小節） 半中空調子

左手による4音（B♭→A→G→A）のオスティナート上に第二主題に由来する動機が右手で展開される。第86小節に付点による音型やrit.の指示、最終拍での休符などにより明瞭な段落感（半終止）を形づくっている。またこのオスティナートは、A音を中心に上下に揺れ動いており、主要音はあくまでA音であると考えられる。

第五展開部（第87～92小節） 半中空調子

短い動機が、右手と左手により交互に休符を挟みながら展開される。一つ一つの音形に長い休符が挿入されていることや、小節の前半部と後半部の音域差と音色差、さらにテンポが少し遅くなっていることな

16 ただし押し手によるもの。

どが相まって、空間的なひろがりを感じさせており、第四展開部のオスティナート上にきめ細かく編みこまれた密度の濃いテクスチャーとは対照的である。また、主要音は定まらず、流動的である。なお、この部分は京流手事物における三味線と箏の掛合かけあひをイメージしたものと思われる。

第六展開部（第93～102小節） 半中空調子

第四展開部の第77小節から約4小節間の右手左手の逆転による部分である。第97小節からは左手のオスティナートの音形が右手にも波及し、第二主題冒頭のリズムの入れ替えによってつくられたスクイ爪による動機と合体している。さらに各拍頭の八分音符は、つねにA音であり、この部分における最低音であることからバス声部の保続音としての機能を持たせている。このA音は、平調子の主要音Dとは完全五度の音程関係にあり、いわゆるソナタ形式の再現部前にしばしば出現する原調のドミナント音の保続音ときわめて近似な用法がとられていることは注目に値する。またこのA音は、第102小節を除き事実上第108小節まで主要音として保続されている。

再現部：第103～152小節

（偽再現部）（第103～108小節） 平調子

この部分については、前述のように調弦がEからE♭に戻されて平調子に安定していることと、第一主題冒頭が再現されていることから、本論においては第103小節からを再現部としたが、再現されるのは1小節のみでそれ以降は第一主題が経過句的に扱われていること、第103小節に明確な再現を告げるアルペジオが用いられていないことなどから、この部分を「偽再現部」として扱うこととした。また、この部分は主要音として展開部の第六展開部で保続音として現れたA音が、引き続き主要音として維持されていることから、この部分を展開部の最終部分ととらえることも可能であり、第103～108小節は、形式的には極めて曖昧なグレーゾーンである。

（真正再現部）（第109～133小節）

第一主題推移（第109～120小節） 半中空調子→平調子

この部分は、提示部の第15～26小節と全く同じものが繰り返され、完全な再現がなされている。ただ、再現されている部分が、第一主題の推移からの部分であるという点が特徴的である。調子は2小節間での半中空調子の後、平調子になる。

第二主題（第121～123小節） 平調子→雲井調子

第二主題冒頭部が原調（平調子）で明確に再現された後、さらに雲井調子でもう一度、より完全な形（2小節）で再現されている。提示部では中空調子のD音から開始された動機が、ここでは完全4度上のG音（平調子）、さらに完全4度上のC音（雲井調子）という具合に、機能と声的には同方向（サブドミナント系）への移行がみられる。もちろん、機能と声に準拠する楽曲ではないので、この説明は当たらないが、少なくとも提示部において平調子→中空調子（E♭→E）にすることによって属調感を演出したことを応用し、再現部では原調である平調子での再現をするのみでなく、さらに平調子→雲井調子（A→A♭）にすることによって下屬調感をもたらし、提示部との調的差異化を図ったのではないかと推量される¹⁷。

推移（第124～133小節） 平調子→半中空調子→中空調子→平調子

提示部の当該部分とほぼ同様であるが、第130～133小節では、上行下行する経過句が2倍の4小節に拡張され、より大きな経過音群を形成している。

結尾部（第134～152小節） 平調子→半中空調子→中空調子および平調子→平調子→半中空調子→中空調子→半中空調子→平調子

再現部の最終部となるこの部分に、アルペジオやオクターヴ重複を伴った明瞭な第一主題の再現がなされており（2小節間）、その後、すぐに第二主題の後半部が接続されている。ここで初めて第一主題の明瞭な再現がなされるわけであるが、前述のように、ここからを再現部とするには、ソナタ形式としての全体のバランスを欠くように思われる。第136小節以降は、主に第二主題からの動機が繰り返され、提示部と同様に終止がなされた後（第149小節）、最後に3小節間の結句が補われ、この楽曲の規模に見合ったカデンツが平調子においてなされて第一楽章を閉じる。曲尾の和音は、主要音はD音であるが、準主

17 同様の趣旨が、千葉2000, p.175でも言及されている。

要音としてA音とG音が鳴り響き、D-G-A-Dという完全四度と完全五度の核音程が印象付けられている。

おわりに

以上、眺めてきたように、《手事》第一楽章は決して典型的ではないものの、明らかにソナタ形式によって作曲されており、ひいては、この三楽章からなる作品が箏一面によるソナタであると認定しうる。それも、ピアノ等の洋楽器と比べ、西洋の機能と声による作曲には圧倒的に不利な箏という楽器で調的諸問題と取り組み、そうした制約を作曲者の真骨頂である変幻自在な箏曲手法と、形式上の斬新なアイデアで補って、彼独自の箏ソナタとして見事に結実させているのである。一般的に宮城道雄の音楽の特徴は、わかりやすく、親しみやすい旋律と、その音楽の描写性にあるといわれるが、《手事》のような洋楽形式に基づく純粋な絶対音楽においても、作曲家としての優れた手腕が遺憾なく発揮されていることは、同時代の邦人洋楽作曲家たちの動向をも視野に入れつつ、今後、もっと注目されてしかるべき事実ではなかろうか。

これをもって《手事》第一楽章の形式に関する「千葉・久留説」の提示とする。

引用・参考文献

小野衛著『宮城道雄の音楽』音楽之友社、1987

吉川英史、上参郷祐康著『宮城道雄作品解説全書』邦楽社、1979

鈴木ゆみ子著「宮城道雄の《手事》に関する一考察」昭和46年度東京藝術大学大学院修士課程修了論文、1971

千葉潤之介著「ソナタ形式と宮城曲『手事』」『宮城会会報』第129号、1984、pp.50-64

千葉潤之介著『「作曲家」宮城道雄—伝統と革新のはざままで』音楽之友社、2000

宮城道雄著、千葉潤之介編『新編 春の海 宮城道雄随筆集』岩波書店（岩波文庫）、2002

宮城道雄著、宮城喜代子、宮城数江作譜『箏曲楽譜宮城道雄作曲集 手事』大日本家庭音楽会、1995

譜例2

《手事》第一樂章「手事」

作曲 宮城道雄
訳譜 久留智之

提示部 第一主題
中蔵に 平調子(第一弦=巻越)

第一主題第一確保

推移

第二主題

第二主題第一確保

第二主題第二確保

第一展開部
展開部 第一展開部
六 E♭-E, → E♭-E

第二展開部

第三展開部

第四展開部

第五展開部 *un poco rit.*

第六展開部 *un poco accel.*

偽再現部
六 E-E♭ 斗 E-E♭

真正再現部 第一主題移

第二主題

結尾部